
白いドレスを

大賀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白いドレスを

【Nコード】

N7135A

【作者名】

大賀

【あらすじ】

親戚のお姉さん「弥生」を好きな歩。まだ八歳の男の子が恋を見つける…そして4年後に――

結婚への憧れ（前書き）

オレの話はかなりわかりぬくいと思いますが、なんとか理解してや
ってください！ちなみに、歩は小学3年生という設定です。

結婚への憧れ

白いフワツとしたドレス。いろいろな鮮やかな花。幸せそうな花嫁の顔。

まさに幸せのスタートラインといった光景だ。

友達を送ってきたメールの写真。それをうつとりと見る女――弥生――。

女を見守る男の子――歩――。

歩は、両親の結婚記念日だとかで親戚のお姉さんの弥生に預けられていたのだ。

「弥生…結婚したいのか？」

「まあね。あたしも19歳だし、早いうちに結婚したいかなあ、なんて」

その時、歩は決めた。――弥生と結婚する――。

今の生活（前書き）

なんか、勢いでつい書いてしまいました。あんまりよくわからないかも知れないですけど……よろしくお願いします。

今の生活

4年後――

家に帰ると、またいつもの不吉な煙が……。帰った瞬間ため息。

「弥生いー、またクッキー作ってんのかよ！」

ここでオレ、歩の4年間を簡単に説明しよう。

両親の結婚記念日とかで弥生の家に預けられていたオレ。あの日――電話で知らせがきた。

「……もしもし、歩君かい？……君のお父さんとお母さんが、交通事故で……亡くなれました」

警察からだった。

ということだ。今は弥生の家で暮らしている。

あの日から、オレも、弥生も変わった。だが、一つだけ変わっていないと思うことが――弥生の料理だあ！とにかく、マズい。この4年間、どんな料理でも一度も美味しいと思ったことなんてない。

もう上手に作れる可能性がないということがはつきりしているというのに、この間からまた料理の練習を初めやがったあ！しかも、昨日からはクッキーだ。

「歩うー、また焦げたあ」

「もうクッキーなんか作れなくなっただっていいだろう？！」

「ダメ。彼氏の今度の誕生日に頑張ってお菓子作ってあげるっていったんだから！」

その言葉に、オレはピキッときてしまった。

言い返す言葉もなく、早足で自分の部屋にいった。

「くそっ、彼氏がなんだってんだよ！」

実は、弥生と結婚すると決心した日から、13歳になった今でも弥生のことが好きだ。

だが、ちょうど3ヶ月ぐらい前、弥生に彼氏というやつかいなもの

が出来てしまった。

それから弥生は彼氏、彼氏。そのことはっかり。

だから、今のオレの毎日は一言で表せば『最悪』だ！
もう少しでオレの血管がぶちぎれてもおかしくはない……。

今の生活（後書き）

どうでしたか？このまま話がいくと、歩のキャラがおかしくなりそう
で怖いんですけど…頑張っ
て、書いていきます！はい…

焦げ?のクッキー（前書き）

この前よりさらに話がややこしくなっていました…

焦げ？のクッキー

弥生のどこに惹かれたのか、オレ自身よくわかっていない。

ただ、弥生の家に預けられたあの日―間違いないく弥生を好きになつていたということはわかってるつもりだ。

とにかく、好きというのがオレの中にある……オレは、おかしいのか？

（自分の）部屋のドアに寄りかかり、うつすらとそんな事を考えた。まっ、とにかく好きなんだからしかたないか……という結論にたどり着く。これもいつものことだ。

台所から、部屋の中にまで焦げた匂いがただよってきた。弥生がまた失敗したのか―

弥生が料理でこんなに必死になつてるとこ―初めて見た。それが、彼氏のためだつていうんだからな。最悪だよ…。

コン、コンと、ドアをノックする音。それが耳もとで聞こえた。

「歩…ちよつと出てきてくれないかな」

この申しわけなさそうな声！絶対オレに何かをさせるつもりだ。でも、弥生が言ってるんだからな……しかたなく、オレは部屋を出る。

―目の前には、皿を持った弥生が。皿の上には焦げたかたまり。

「歩、お願い！味見して」

さて、電話を近くにもつてきておいたほうが良さそうだ。もう少しで、救急車を呼ぶことになるかもしれないからな―

「…まずい」

これがオレのクッキーらしきものを食べた感想だった。

弥生は、悲しそうな顔をする。ああ、こんな顔なんて見たくなかつたのに…。

オレの感想を聞いて、弥生はすぐごと台所に戻った。オレは

そんな悪いことを言った覚えはないし、オレのせいでもないのだからが…なぜか自分が悪いことをしたような気持ちになる。

あーあ、こんなやつなんか好きになりたくなかった。こんな…オレの手がとどかないような所にいるやつなんてな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7135a/>

白いドレスを

2011年1月21日14時29分発行